

大阪市総合教育センター
教育振興担当 実践研究グループ
首席指導主事様

研究コース
A グループ研究A
校園コード (代表者校園の市費コード)
531062
選定番号
145

代表者	校園名:	野田小学校
	校園長名:	川辺 智久
	電話:	06-6461-0520
	事務職員名:	児嶋 桜子
申請者	校園名:	野田小学校
	職名・名前:	主務教諭 屋良 一輝
	電話:	6461-0520

令和7年度 「がんばる先生支援」 報告書

◇「がんばる先生支援」について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	A グループ研究A	研究年数	新規研究 (1年目)												
2	研究テーマ	「新しい時代を生きる子どもに必要な資質・能力の育成」 ～ 2030年学習指導要領に向けての基礎研究 ～															
3	研究目的	<p>(1)次期学習指導要領を見据え、今後子どもに求められる資質・能力を育てる新たな指導・支援の方法を調査・研究する。</p> <p>(2)子どもの実態や資質・能力の課題をもとに、各自で研究テーマを選択し、新たな指導・支援の方法で授業を実践する。</p> <p>(3)授業実践の成果と課題を振り返り、子どもの資質・能力の向上につながっているか検証する。</p> <p>なお、本研究では、昨年度までの取組みを下地にし、子どもの実態をもとに教員自身が主体的に課題解決に取り組むよう「ボトムアップ型」の研究を進め、研究活動に主体的に取り組む教員集団の形成を図るとともに、子どもの資質・能力向上につなげていく。</p>															
4	取り組んだ研究内容	<p>いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 4月：これまでの研究の経緯や、昨年度の子どもの実態や資質・能力の課題をもとに、学校全体の研究計画を立案した。 ・ 4～5月：年度当初に各研究グループで、テーマを選択した。 「個別最適な学び」(1年) / 「社会に開かれた教育課程」(2年) / 「協働的な学び」(3・4・5年) / 「デジタル学習基盤」(6年) 選択したテーマについては、各自、文献等で内容を深めるとともに、「具体的な取組み(授業をどのように工夫するのか)」を立案した。 ・ 5～2月：「具体的な取組み」に基づいて、「主体的、対話的で深い学び」を基本とした日々の授業で計画的に指導や活動を実施した。 ・ 8～2月：外部講師に、研究テーマに基づいた授業改善の視点と具体策について、今後の方向性についての示唆をいただいた。 大阪教育大学 住田教授(国語科授業講師)(7月・12月) 大阪大谷大学 狩谷講師(図工科研修講師)(7月) 愛媛大学 井上准教授(社会科授業講師)(9月) 矢田東小学校 梶原校長(体育科授業講師)(10月) 鷺洲小学校 川西校長(算数科授業講師)(11月) 総合教育センター 山角指導主事(総読授業講師)(11月) 早稲田大学 大村准教授(研究発表会 講演講師)(2月) ・ 6月～1月：授業改善計画をもとに授業実践を行うとともに、他校の公開授業や研究発表会に参加し、自身の授業実践を改善する機会とした。 全日本特別支援教育研究連盟全国大会 北海道大会(10月) 全国小学校社会科教育研究協議会研究大会 群馬大会(11月) 全国小学校理科研究協議会研究大会 愛知大会(11月) 新算数教育研究会全国大会 大阪大会(11月) □ 岡山大学附属小学校 自主研究発表会(2月) 奈良女子大学附属小学校 公開研究発表会(2月) ・ 7月～1月：外部講師から示唆をいただいた指導法や、他校の実践から取り入れた指導法により、各グループが立案した「具体的な取組み」に基づいた授業実践を行った。この間に全教員が1回以上の公開授業を実施した。 ・ 12月～1月：研究成果と課題、改善策をグループごとにまとめ、研究報告会に向けての準備を行った。 ・ 2月：研究報告会を実施し、1年間の研究について報告し、参観者による研究協議、外部講師やスクールアドバイザーによる講評・助言を受けた。 ・ 3月：次年度に向けての課題を整理する。 															
5	研究発表等の日程・場所・参加者数	<p>研究発表等を実施した日・場所・参加者数を記載してください。</p> <table border="1"> <tr> <td>日程</td> <td>令和 8 年 2 月 13 日</td> <td>参加者数</td> <td>約 37 名</td> </tr> <tr> <td>場所</td> <td colspan="3">大阪市立野田小学校 多目的室</td> </tr> <tr> <td>備考</td> <td colspan="3"></td> </tr> </table>				日程	令和 8 年 2 月 13 日	参加者数	約 37 名	場所	大阪市立野田小学校 多目的室			備考			
日程	令和 8 年 2 月 13 日	参加者数	約 37 名														
場所	大阪市立野田小学校 多目的室																
備考																	

大阪市教育振興基本計画に示されている、「子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力」の育成および「教員の資質や指導力」の向上について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。

【見込まれる成果1】

- 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成
- 「教員の資質や指導力」の向上

多様な他者との交流を通して、よりよい学びを生み出し、必要な資質・能力を育成する。また、子ども一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせり、よりよい学びを生み出していくようにするための実践研究に取り組む。

＜検証方法＞

校内調査における「授業では、課題を、学級の友達と話し合って学習することがよくある」に対して、最も肯定的な回答をする児童の割合を前年度以上にする。【R6:76%】

〔検証結果と考察〕

ペア学習、グループ学習等、自分の考えと友達の考えを共有する場面を設定し、学習者用端末等を活用した調べ学習や発表などを行うことで、児童同士が学び合い、理解を深める姿が見られた。話し合い活動では、発言を聞く際には自分の考えの共通点や相違点を意識して聞くようにしたり、共感的に聞いたりする指導を行った。また、考えを述べる際には、事実と考えを明確に分けて発言できるように指導した。友だちの見方や考え方に触れることで、子ども一人一人が視点を広げ、自分自身の考えを変容させて、新たな学びを得ることができた。その結果、校内調査における「授業では、課題を、学級の友達と話し合って学習することがよくある」に対して、最も肯定的な回答をする児童の割合は80.6%であった。

【見込まれる成果2】

- 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成
- 「教員の資質や指導力」の向上

子どもの多様な特性を尊重し学習意欲を引き出すことを目的として、子ども自身が自分で問題を設定し、その問題を解決するために協働しながら進める学習活動や、子ども一人一人の学習進度や個性に合わせた学習活動を実践することで、子どもが自己の可能性を最大限に引き出すことを目指す。

＜検証方法＞

校内調査における「授業では、自分からすすんで学習にとりくんでいる」に対して、肯定的な回答をする児童の割合を93%以上にする。【R6:90%】

〔検証結果と考察〕

子どもが進んで学習に取り組むことができるよう全学年で授業づくりに取り組むとともに、ICT機器を活用した児童にとってわかりやすく、楽しく学べる授業を実践した。また、各学年の実態に応じて教材、掲示物等を作成・活用し、子どもの知的好奇心を喚起する教材選定、表現活動や話し合い活動の設定など、子どもが意欲的に学習に取り組めるような指導や活動の工夫に取り組んだ。さらに、全学年で「自主学習ノート」を配付、実施することで主体的な学習習慣の定着を図った。その結果、校内調査における「授業では、自分からすすんで学習にとりくんでいる」に対して、肯定的な回答をする児童の割合を90.4%であった。

【見込まれる成果3】

- 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成
- 「教員の資質や指導力」の向上

子どもの実態をもとに教員自身が主体的に課題解決に取り組むよう「ボトムアップ型」の研究を進め、研究活動に主体的に取り組む教員集団の形成を図る。

＜検証方法＞

教職員アンケート「今年度の研究は主体的に取り組む、研究内容を深めることができた」に対する肯定的な回答の割合を75%以上にする。【今年度新規】

〔検証結果と考察〕

年度当初に子どもの実態や課題をもとに各研究グループでテーマを選択し「具体的な取組み」を立案し、日々の授業で実践を行った。そして、研究授業等の機会に学校全体で深めるとともに、年度末の報告会で共有した。さらに、今後子どもに求められる資質・能力を育てる指導・支援の方法を調査・研究するため、外部講師を招聘し、授業改善の視点と具体策について示唆をいただくとともに、教員が他校の公開授業や研究発表会に参加する機会を設けることで、自身の授業実践を見直し、改善する機会とした。その結果、教職員アンケート「今年度の研究は主体的に取り組む、研究内容を深めることができた」に対する肯定的な回答の割合は100%であった。

6	成果・課題	<p>【見込まれる成果4】</p> <p><input type="checkbox"/> 「子どもが心豊かに力強く生き抜き未来を切り拓く力」の育成</p> <p><input checked="" type="checkbox"/> 「教員の資質や指導力」の向上</p> <p>日々の教育活動を通してICT機器を活用し、子どもにとってわかりやすく楽しく学べる授業を実践する。<input type="checkbox"/></p> <p>≪検証方法≫</p> <p>授業日において、児童の8割以上が学習用端末を活用した日数が、年間授業日の50%以上にする。 (ただし、教育委員会事務局が定める学校行事等をICT活用が適さない日数を除く)【R6:0.5%】</p>
		<p>[検証結果と考察]</p> <p>7月の夏季休業中にICT機器の活用研修を実施し、CanvaとSKYMENUの授業での活用について全教員で共有した。また、同じく夏季休業中のメンター研修でもさまざまな協働学習で役立つアプリケーションについて共有し、教員のICT機器活用意欲の向上を図った。日々の授業で、他者や他学年との交流を活発に行うためのツールとして役立つことができた。その結果、授業日において、児童の8割以上が学習用端末を活用した日数は、12月現在の累計で授業日の41.5%であった。年度末には概ね50%を達成する見込みである。</p>

6	研究全体を通じた成果と課題	<p>【研究全体を通じた成果と課題】 研究発表会等で使用した資料や研究冊子から引用し、端的に記述してください。</p>
		<p>1. 新規研究(1年目) ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p>
		<p>【成果】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの実態から出発し、各学年が主体的にテーマを設定するボトムアップ型の研究体制を確立することができた。 ・発達段階や学年の課題に即した研究テーマを設定したことで、めざす子どもの姿と具体的な指導・支援の手立てが明確になった。 ・研究の過程における授業づくりや協議を通して、教職員一人一人の主体性と協働性が高まり、組織としての研究推進力が向上した。 ・発表会を通して、本校の研究成果を広く発信するとともに、外部からの評価や助言を得ることで、研究の妥当性と方向性を確認することができた。 <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各学年の研究成果を学校全体のカリキュラム・マネジメントの視点で体系化し、縦のつながりをより明確にする必要がある。
		<p>2. 継続研究(2年目) ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p>
		<p>3. 継続研究(3年目)</p>
		<p>≪代表校園長の総評≫</p> <p>1. 新規研究(1年目) ※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する</p> <p>研究発表会当日は、参会した他校の教職員からは「各学年でテーマを設定し研究に取り組んでいる体制がよい」「子どもの実態から学年ごとにテーマを設定する方法が斬新で理にかなっている」「発達段階や実態に応じたテーマ設定により、めざす子どもの姿に向けた具体的な手立てが明確になっている」など、肯定的な意見が多数寄せられた。講師先生からも、本校の研究内容および研究推進体制について高い評価を得た。</p> <p>本校では、子どもの実態から出発し、各学年が主体的にテーマを設定して研究を進めるボトムアップ型の研究体制を構築してきた。この取組は、教職員一人一人の主体的な参画と協働によって支えられたものであり、1年間の実践の積み重ねが発表会という形で結実したものと捉えている。準備および日々の授業実践の積み重ねは容易ではなかったが、研究の過程そのものが教職員の資質・能力の向上につながるとともに、子どもたちの主体的な学びを支える基盤の形成に寄与したと考える。</p> <p>今年度の成果と課題を整理し、築いた土台を大切にしながら、次年度は実践をさらに深化させ、子どもたちの主体的・対話的で深い学びの一層の充実を図っていく。</p>
		<p>2. 継続研究(2年目) ※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する</p>
<p>3. 継続研究(3年目)</p>		